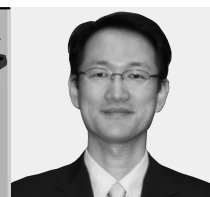
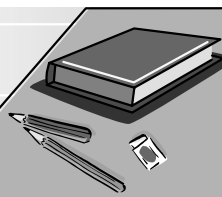


学生時代と図書館 67

— 図書館のニガテな学生、または学生のニガテな図書館 —

橋本 勝雄



大きな声では言えないが、とにかく図書館がニガテだった。用事があって足を踏み入れることはあっても、喜んで図書館に向かうことはまずなかった。どの図書館がいい悪いの問題ではない。どうしてこんな苦手意識を抱えていたのだろう。

その1。行くたびに閉館だったから。近頃は24時間年中無休のコンビニのようなものさえあるらしいが、たいがい図書館にはきちんと休館日がある。知らずに出かけた学生が休館掲示の前でポウゼンと立ち尽くしている光景は、間抜けというよりも日ごろろくに利用していないのが一目瞭然で、見ているものなど誰一人いないにせよ、あまり精神的によろしくない。偶然にしてもそんなことが何度か続けば、誰だって図書館から足が遠のくというものだ。ちなみに、ずっとサボってた講義に出席してみたらタマタマ休講だったという場合はさほどショックではないわけだが、そもそもそんな講義には二度と顔を出さないのが正しい学生の「心意気」とされていた古き良き時代であった。

その2。周囲と同じことをするのが不得手だったから。アマノジャクかヘソ曲がりか、まわりがテンプレうどんをすする学食で小説を読み、友人がだべっている喫茶店で授業の予習をするのが癖で、学生時代に一番勉強した場所はおそらく深夜のミ〇ド（BGMとアメリカンに溺れながら）。マンガはよく読んだが、そのころ始まったばかりのマンガ喫茶では読めなかった。タバコに手を出さなかったのだから知り合いにヘビースモーカーが多すぎたからかもしれない。だから図書館で勉強するなんてモンダイガイで、30分も経たないうちに、周囲の「勉強してる」オーラに圧倒されて逃げ出す始末。今思えばイタリア語をなんとか続けられたのは、どれも極端な少人数授業で、うっかりすると教授と一対一で差し向かい、という環境だったからだろう。大人数の講義でいったい何をしていたのか、ろくに覚えていないのである。

その3。プレッシャーに弱かったから。勉強はできなくたって、本を探して読むということなら、遊ぶ金はあっても本を買う金はない学生にとって図書館は理想の場所だったはずだ。ところが、小規模な図書館でもそこに一生かけて読みきれない本があるという事実に加えて、埃っぽいような湿ったような匂いのする閉架室の迷宮といくら繰っても終わらないカードキャビネット、さらにはオンラインによる図書館提携サービスに、読書欲が萎えてしまったように思う。今日はこの論文を読む、あの小説を読破すると決心していても、それよりこっちの方がより重要だとか面白いとかいうその他大勢の本からの無言の圧力／潜在的な誘惑に勝てず、ためらっているうちに見ているだけでお腹いっぱい、気がつけば『芋粥』状態になっていた。書店だと話は違う。同じ本にまた会える図書館とは違って書店の本棚の前では、今ここで買わなかったら二度とお目にかかれなかもしれないと思えば手が出てしまうし、財布から現金が消えていくとなるとそれなりに真剣な決断を迫られる。結局、書架からお目当ての本をさっさと引き出していく他の学生をうらやましく見送りながら優柔不断な自分を罵ることになった。閉館を告げる館内放送に押されて借り出した本にしても、今度は返却日が気になって読み終わってないのに慌てて返してしまうか、するすると期限をオーバーするかのどちらかである。

こんな学生が図書館なしではやっていけない道に進み、どのように苦手意識を克服したのかはまた別の話だ。だが正直なところ、今でも図書館のゲートで差し出したカードに反応がなくて立ち往生するたびに、今日はこのまま帰ってしまおうかと思わないでもない。ひょっとすると、図書館の方が私をニガテにしているのだろうか。

はしもと かつお（准教授・イタリア文学）